

1. 初めに

本レポートでは、ストラスブール研修で獲得した、積極性・寛容性・対話力について述べた後、フランス人像から考察されうる求められるべき国際的人格像について論ずる。

2. 本論

2-1 積極性

ストラスブールと日本とを比べると、前者ではより大学内や商業施設内において、立場を超えた会話が弾んでいると感じた。教師や生徒の間、店員と客との間に多くのやり取りが見られ、更にそれらは講義や販売に関連した内容のみならず、個人的な会話が多かった。このことから、フランスでは社会の立場上での付き合いであっても互いを個人として尊重していることがよく伝わってきた。

ここで互いを個人として認識しようとする時、まず相手を詳しく知る必要がある。また相手に近づくためには、相手に自分を知り、かつ興味を持ってもらわなければならないから、自分から動くという積極性が求められる。このように考えると、フランスの制度や気風に納得がいった。例えば、授業は指名制でなく挙手制である。プレゼンテーションの際にも、発表に対して日本人グループよりも明確なリアクションがあり、講義に参加する心持が感じ取れた。さらに、日本人の視点から見ると、フランス人女性の化粧やファッションセンスは主張が激しいように思われる。これは、外見を通して自己を表現することで、他者に自分への興味を持たせようとしていることと表れだと考えられる。以上のことから、多分野における積極性を感じたが、これらのことを逆に言えば、積極的に求めなければ何も手に入らないということが分かる。表現・追求しようとするほどの自己や関心がなければ、人に興味を持ってもらうことも無く、また学問の核心に近づくこともできないからである。

つまり、一人ひとりが自己表現を行う積極性を持っているからこそ、フランスでは個人を尊重した社会が実現されていると見ることができる。

2-2 寛容性

前述したような個々人の自己表現とは、それぞれが異なる価値観を持っているということを意味する。すると当然に、社会の各場面で価値観の差異による衝突や、派生する形での利害対立が起こりうる。このような際に、相手の事情を斟酌して自らの折れ所を探すことが必要とされる。

フランスでは、自分の譲れない部分を主張しつつも、ある程度まで相手に対し寛大な人が多いように思われた。例えば宿泊所でバスタオルの補充をお願いした時、職員のかたは一室だけの追加は認められず、全室への追加は予算上出来ないとしつつも、次回の清掃入室日を教えてくださった。また、ポットを壊した際にも笑って許してくださった。このような態度は、物が不完全であってもさして気に留めないという社会的態度にも通じているように見受けられる。宿泊所の備品が予め無かったり壊れたりしていること、道路に汚れやごみがあること、授業が開始時刻から遅れることなどがそれを示している。

ただし、全てにおいてそれが当てはまるわけではない。フランス人には、国際的に優秀であったり著名である人物が多いことから、興味を抱く積極的対象に関しては、徹底的に追求することができる人種なのであると考えられる。

これらのことから、フランス人は自己の価値観において重要なものが何かを定め、それ以外は他との折り合いをつけて完全性を求めず受け入れる寛容性があるように思われる。

2-3 対話力

自己欲求の追求を求める時でも、社会で生きる以上は他者の意思を尊重する必要がある。相手を知り、利害調整や協力援助を図るためである。このとき、意思疎通手段として言語が要求されるが、相手の意識を汲み取るためには、非言語的なサインをも読み解かなければならない。これらを総じて対話力と呼ぶと考えられ、特に言語が不自由な際には後者の手段が求められる。言語の一致する場合も目線や表情、態度などで好悪感情を判断することができるから、言語と比較した際には、非言語的表現がより優位だと思われる。

研修中に日本語学科の学生と接した際には、彼ら彼女らが身振り手振り、擬音語や擬態語を多く用いていた。指示対象と結びついた言語が意識されずとも、それら動作とともにフランス語を聞くことで相手との意思疎通を図ることができた。また、ホストファミリーの中でフランス語のみが通じる言語であった方がいらっしやったが、状況的文脈と単語、身振り手振りでニュアンスを推察することができた。

フランスでは、挨拶の際に抱擁することやダンスが一般的であることからすると、ノンバーバルコミュニケーションが重要視されているように思われる。普遍的な意思表示手段としての言語を磨くだけでなく、身体表現による意思表示の重要性を感じた。

3. まとめ

以上の三点が、研修で意識され又研修後において自己の中で新たに獲得された事項である。ただしこれらは独立の事項でなく、互いに結びつくことによってフランス社会を構成しているように思われる。つまり、積極性・寛容性・対話力によって個人の尊重を図り、互いの利益調整をしつつも、一人ひとりが興味を持つものを追求するといった社会である。この社会は、個人の尊重を掲げる近代社会が目指すべき形であり、国際的にも求められていると思われる。即ち、現在国際社会に生きようとする私達は、このような社会を構築することを目指さなければならない。では、ここで求められる国際人像とは何か。

無論、理想社会を目指すためには積極性・寛容性・対話力を有していなければならない。ただそれだけでは足りず、日本的な「礼」の精神も重要だと考えられる。これは他者を尊重するという意識であり、それに伴う形で行動表現がなされるからだ。社会に生きるということは、自己実現を図りつつ人と接していくということである。ここでは、他者への尊重が欠かすことのできない意識的要素である。その現われが、日本人には社会的風土として「礼」として備わっていると考えられるが、更にフランス人社会から刺激を受けることで、社会が望むべき方向へとより促進されうるように思う。

既存の社会で美德とされている姿勢を、他の社会の視点から見つめなおし、双方の美点を組み合わせることで、国際社会にふさわしい人格が形成されていこう。